

新天皇が即位し、新元号「令和」が幕を開けた五月一日。「号外です!」。札幌駅の地下街に、新聞社員たちの声が響いた。連休の最中とあって地下街は買い物客や観光客で賑わっていた。号外を求める人たちの手が次々と伸びてきて、途切れることはほとんどなかった。

「平成」の三一年間が終わり、新たに始まった「令和」時代。四月一日の新元号発表前後から、高まった国内のお祝いムードはピークに達していた。お正月というよりも、二〇〇〇年前後の「ミレニアムブーム」に近かったように思える。四月二七日(五月六日)に異例の一〇連休という超大型連休が実現した。スポーツや文化、経済など各界で「平成最後」と「令和最初」が注目され、ビジネスチャンスをもたらしした。

新聞業界も例外ではない。新聞の号外が近年になく価値が高まった。インターネットのオークションでは号外が高値で売られ、新聞社には号外を求める人たちの電話や訪問も相次いだ。

だが、あの「昭和」から「平成」への代替わりを知る者にとつては、違和感を禁じ得ない。天皇の死去をどう表現するか、天皇の戦争責任は……。『自粛ムード』が蔓延した昭和の終わりと平成の始まりにあつてさえ、まだあつた天皇制をめぐる議論が

「象徴天皇」って何だ？

今回はほぼ消えてしまった。

◇ 「平成」から「令和」にかけて、一冊の本を手にとった。赤坂真理さんの『箱の中の天皇』(河出書房新社)だ。七年前に、天皇の戦争責任をテーマにした『東京プリズン』を出版し、話題となった作家だ。

◇ 今回の作品は、太平洋戦争後、日本を占領した米国の「マッカーサー」と、主人公の「わたし」が時空を超えて出会い、日本国憲法の第一条に記された「象徴天皇」の意味を問いながら、米国の代理人の「マッカーサー」と日本人の私がそれぞれの思いを交錯させるストーリーだ。

◇ 前天皇が自ら退位の意向を表明した際の「お言葉」もところどころに織り交ぜながら、戦後から平成へと続く象徴天皇のあり方を追い求めた力作だ。

◇ 「天皇」とは、私たちにとつてどんな存在なのだろうか

◇ 五月一日朝刊の新聞各紙を読み比べてみた。「等身大で探る明日の皇室」(朝日新聞)、「変化にしなやかに対応を」(毎日新聞)、「平和と安定へ努力重ねたい」(読売新聞)、「新しい風を国民と共に」(北海道新聞)、「新しい見出し」。おおむね平成時代を好意的に捉え、令和時代への期待と課題を提示す

内容だった。

◇ マスコミ各社の世論調査でも、天皇制を肯定する意見が多数を占めた。共同通信が五月一、二日に実施した調査によると、天皇制について「今の象徴のままが良い」が約八〇%。「象徴ではなく神聖な存在にする」(約七%)、「天皇制は廃止する」(約五%)はともに少数派だった。「平成」という三〇年間を経て、国民は皇室への親しみを増し、天皇制を受け入れているようだ。

◇ 赤坂さんは『箱の中の天皇』で、前天皇を「初めて象徴天皇として即位した人」「初めて、象徴として可視化された天皇」と表現した。戦争の傷跡が残る国内、世界をはじめ、震災の被災地などの弱者を慰問して回った前天皇について、憲法が国家権力を抑制するためにあることを体現したと指摘した。ただし、弱点にもふれていた。「象徴」の中味は国民の質で決まり、「代替わりするとモードがかなり変わる」ことだ。

◇ 改元を契機に、「女系天皇」が再びクローズアップされている。だが、天皇をめぐる問題を、世継ぎ問題だけに矮小化せず、タブーなき議論が必要だ。そうでなければ、いつかきた道をたどってしまいかねない。

◇ 八洋